慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『祇園物語』の伝本
Sub Title	
Author	柳沢, 昌紀(Yanagisawa, Masaki)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1993
Jtitle	三田國文 No.19 (1993. 12) ,p.28- 34
JaLC DOI	10.14991/002.19931200-0028
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19931200-0028

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『祇園物語』の伝本

柳沢昌紀

はじめに

『祇園物語』は、儒学を基盤とする『清水物語』（寛永十五年刊）の各条をあげて、仏教の立場から論評した書物である。作者は、延宝三年（一六七五）刊の『諸書籍題林』に「清水修行」と記され、野間光辰氏はこれを清水寺執行宗親であると推定しておられる。[1] 小稿は、本作品の伝本調査報告である。実見しえた板本の数はまだ不十分であるが、その版種と本文について一応の整理を行ってみたいと思う。

一　版種

『祇園物語』について、刊記を有する本の存在は報告されていない。内容や装訂の面から、刊年は寛永末年を下らぬとの推定が諸先学によりなされている。版種に関しては、『近世文学未刊本叢書・仮名草子篇一』[2] の解題に「初版利用の再刻本」がある旨、記されている。今回の調査でも、初版とその覆刻版という関係になると思われる二版を確認したので、以下に紹介する。

（A）大阪女子大本（①大阪女子大学附属図書館　九一三・五／G）

大本二冊。

表紙　濃縹色地紙に雷文繋ぎ・蓮華唐草文様空押し。二七・九×一九・七糎。

題簽　上下巻とも剝落。

内題　「祇園物語上（下）」（上下巻とも一丁表）。

版心　「祇上　一（～四十八）」、「祇下　一（～四十八）」。

匡郭　なし。

印面高さ　上巻二二・〇糎、下巻二一・三糎（上下巻とも一丁表本文初行）。

本文　毎半葉一一行、行二三字内外、句読点・振仮名・返点付刻。

丁数　上下巻とも四八丁。

刊記　なし。

印記　「大阪女／子大学／図書」、「□／政吉／寶」（丸い墨印）ほか。

ほかに、次の諸本も（A）である。

②国文学研究資料館（ナ四／四六）
③五季文庫
④早稲田大学図書館（へ一三／一二一四）
⑤筑波大学附属図書館（ル一五〇／七、存上巻）
⑥国立国会図書館（一四四／七二）
⑦天理大学附属天理図書館（九一三・六一／イ一六五）
⑧刈谷市立中央図書館村上文庫（一八一）

但し、⑧刈谷村上文庫本は現在書庫に見当たらないとのことで、国文学研究資料館マイクロ資料により版種を判断した。なお③五季文庫本、④早大甲本、⑦天理図書館本には、大阪女子大本で剝落してしまった原題簽が残っており、「祇園物語上（下）」と刷られている。また早大甲本、天理図書館本は、丹表紙本である。[3]

（B1）成城大本（⑨成城大学図書館　九一三・五一／SH四九g）
大本二冊。
表紙　雷文繋ぎ・蓮華唐草文様空押しのある丹表紙。二七・三×一九・〇糎。
題簽　表紙左肩に「祇園物語上（下）」
内題　（A）に同じ。
版心　（A）に同じだが、上巻三〇丁の版心題なし。同丁は、丁付も埋め木の可能性あり。
匡郭　（A）に同じ。
印面高さ　上巻二一・四五糎、下巻二一・三糎。
本文・丁数・刊記　（A）に同じ。
印記　「岡田眞／之藏書」、「成城／學園／圖書」。

ほかに、次の諸本も（B1）である。
⑩西尾市立図書館岩瀬文庫（九八／一七）
⑪都立中央図書館東京誌料（〇〇九／四、下巻一六丁欠）
⑫慶応義塾図書館（一四六／一八七）
⑬国立国会図書館（一四六／一六九）
⑭お茶の水図書館成簀堂文庫
⑮東北大学附属図書館狩野文庫（狩／四／一一三九三、下巻四丁欠）
⑯京都大学文学部穎原文庫（Pb／一三）
⑰京都府立総合資料館（特九九五／六）
⑱筑波大学附属図書館（ル一五〇／八）
⑲東洋文庫岩崎文庫（三／F／a／ろ／六〇）
⑳今治市河野美術館（二八四／三七七）
㉑佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫（〇九三／四）
㉒ソウル大学校中央図書館（三二一〇／一五）

このうち⑳河野美術館本、㉑小城鍋島文庫本、㉒ソウル大本は、国文学研究資料館マイクロ資料により版種を判断したもので、原本は見ていない。略解題を示した成城大本のほか、⑪東京誌料本、⑫慶応本、⑭成簀堂文庫本も原題簽が残る丹表紙本。さらに⑯穎原文庫本、⑰府立総合資料館本、⑱筑波大乙本も丹表紙本。[4]

（A）と（B1）は、本文の字配り、字体に至るまで基本的

に一致する。一方が初版で、他方がその覆刻版であると考えて良かろう。（A）諸本と（B1）諸本を詳細に比べてみると、（B1）諸本は全体的に印面高さがやや低く、句読点であるべきところが濁点だったり、その逆だったりする誤りが目立つ。また上巻三四丁表三行目から四行目にかけて、（A）の本文が「…あらそひなき／なり。たゝし…」と「そひなき」を埋め木で補った形になっているのに対し、（B1）の本文は「…あらそひ／なき也。但…」と整った形をしている。これらは、（B1）が（A）に基づく覆刻版であることを示すものと言えよう。よって初版は（A）の方であると思われる。

ただここでひとつ気になるのは、A版に、上記「そひなき」の埋め木補正が行われていない本、すなわち、より早い刷りの本が存在するかもしれないということである。今後の調査は、この点に注意して進める必要があろう。

またA、B両版の開版時期だが、A版は寛永十五年（一六三八）十月（『清水物語』の刊年月）以降の寛永年中、B版も寛永末年もしくはそれをあまり下らないのではないかとの印象を受ける。

ところで、B版には版心部分に補修の加えられた本が存在する。

（B2）早大乙本（㉓早稲田大学図書館　ヘ一三／三六八）
大本二冊。
表紙　縹色地紙に卍繋ぎ・牡丹唐草文様空押し。二七・一×一八・七糎。
題簽　（B1）に同じだが、上巻のはかなり刷りが悪い。
内題　（B1）に同じ。
版心　上巻三〇丁の版心題が「祇上」と埋め木補正されているが、同丁の丁付はなし。
匡郭　（B1）に同じ。
印面高さ　上巻二一・五五糎、下巻二一・三糎。
本文・丁数・刊記　（B1）に同じ。
印記　「早稲田／大學／圖書印」ほか。
備考　上巻一三丁裏に四箇所ほど朱筆訂正が施さる。

早大乙本の刷りは、（B1）諸本より後と思われる。前記のごとく（B1）諸本には上巻三〇丁の版心題がなかったが、早大乙本は、その版心題が埋め木で補われている。ところが代わりに、（B1）諸本にあった同じ丁の丁付がなくなってしまっている。その理由は定かでないが、これも前記の通り、（B1）のこの丁付は埋め木のようにも思われ、それが早大乙本では脱落してしまったということなのかもしれない。なお、本文には（B1）諸本との異同は見当たらない。

さて、今回の調査ではもう一本、奇妙な本に出会った。それは関大本（㉔関西大学総合図書館　C／九一三・六一／K一／一）である。この本は、上巻の一～一五丁、一八～二〇丁、二六丁、および下巻の三丁、四丁、六丁、七丁が（A）で、それ以外の丁が（B1）であった。（A）の丁と（B1）の丁は小口の汚れ具合が異なっているので、関大本は二版を取合せて綴じ直した本と考えて良かろう。

以上の通り、管見に入った『祇園物語』の版種は二版三種であった。本文に関していえば、初版と思われるA版の本文とその覆刻版であるB版の本文の二種であることがわかった。次節では、A版とB版の本文を比較、検討しようと思う。

二　本文

まず、実際にA版本文とB版本文の異同を示そう。対校には、おのおの早い刷りであると思われる①大阪女子大本と⑩岩瀬文庫本を用いることにする。[6] なお繁雑になるのを避け、清濁の差、句読点や返点の有無、濁点と句読点の取り違え等は、本文解釈上問題となりそうなもののみ記し、それ以外は省略する。また、異同の種類を次のような記号で最下段に示すことにする。

a－A版になかった振仮名がB版で追加されたもの。

b－A版にあった振仮名がB版で脱落したもの。

c－本文上の正誤という点で、A版が正しくB版が誤りであるもの。

d－同じく、A版が誤りでB版が正しいもの。

e－同じく、どちらとも判断しがたいもの、およびどちらも可能なもの。

	（A）大阪女子大本		（B1）岩瀬文庫本	
上	一裏10　板に	a	板（はん）に	
	五表5　あひかなわひと	d	あひかなわんと	
	6　観音御心		観音御心	
	五裏3　定業亦能轉	a	定業亦能轉（またのよてん）	
	七表3　災難		災難（さいなん）	a
	10　離		離（はなれ）	a
	七裏1　くわたひを引。きゆるされ候		くわたひを引き。ゆるされ候（これ）	d
	八表5　之		之（いつわ）	
	5　偽りは	a	偽りは	a
	九表5　したか。ひ。	d	したがひ。	d
	8　無理	d	無理（むり）	d
	九裏3　おほく。なり	d	おほくなり。	d
	6　なかりしゆへ。に。	d	なかりしゆへに。	d
	一一裏4　随虎	d	随唐（すいたう）	d
	一四表4　相應	a	相應（さうおう）	a
	8　禅	a	禅（ぜん）	a
	8　律	a	律（りつ）	a
	一六表7　堅受	a	堅受（かたくうけて）	a
	一七裏10　伏犠	c	伏犠（ふけつき）	c
	一八表5　鏡に	a	鏡に（かがみ）	a
	一九裏10　又次に	e	一又次に（みちひく）	e
	二〇裏4　導に	a	導に（みちひく）	a
	二一裏11　指も	b	指も（ゆび）	b
	二四表3　楠	a	楠（くすき）	a
	二四裏3　学問	b	学問（がくもん）	b
	二六表10　身	c	身（みづ）	c
	二七裏11　たのしむあり	c	たのむあり	c
	三〇裏4　孫楊	c	孫楊（そんやう）	c

三一裏1　一又次に　又次に　e
三三表5　一又次に　又次に　e
三四裏3　すなのとり　すなとりり　c
6　霖雨　霖雨　d
三五裏1　和漢　和漢　c
三七表10　軍法　軍法　b
三九表9　越済　越済　e
四三表3　あらそひなき／なり。た　あらそひ／なき也。但　e
四四表8　孟子　孟子　c
四四裏3　東郭あり　東郭あり　a
四五表10　勇猛　勇猛　e
四五裏4　勇猛　勇猛　e
下一表8　夫婦　夫婦　a
一裏1　主も　主も　a
三裏6　佛に　佛に　a
四表7　我みしかき　我みじかき　a
10　根本　根本　a
四裏1　孔老の道　孔老の道　a
4　死しては　死しては　b
5　今生の　今生の　a
8　未来　未来　a
11　品〻　品〻　a
五表6　礼　礼　a
11　三　三　a
五裏10　善根　善根　b
六裏7　浄飯　浄飯　c
8　窘苦　窘苦　c
9　不邪婬　不邪婬　b
七裏8　啓と　啓と　c
九表5　志に　志に　c
一〇表7　夷斉　夷斉　d
一一裏6　修行　修行　c
9　生と　生と　a
一二表2　蠡　蠡　c
一五表1　捨る　捨る　b
一八表3　己心　己心　a
一八裏1　仁者なさんため　仁者なさんため　a
一九表1　仏と申つき　仏と申つき　a
二〇表10　造次にも　造次に候　c
二一表1　悟　悟　b
2　桓魋　桓魋　a
二一裏1　斯文　斯文　b
11　才工　才工　b
二四裏7　大聖人　大聖人　a
8　生つき　生つき　a
二六裏1　改めてば　改めては　d
2　畫師　畫師　b
二七裏7　仏のさわり　仏のさるり　c
二八表9　供養　供養　b

三一裏7	銘物	銘物	a
三四裏10	繆公	繆公	a
三八表1	乞食	乞食	b
三八裏7	居	居	e
三九表5	段干生	段干生	b
四一表6	洗米	洗米	b
四一裏5	報恩の表式	報恩の表式	b
四二表1	罪業	罪業	b
8	無始	無始	d
四二裏3	不足	不足	b
10	満足	満足	b
四四裏6	心をつけ	心をいけ	c
四七表7	浮ひて	浮ひて	c
四八表1	星は	星は	b

御覧の通り、異同の六〇パーセント以上は、振仮名の追加か脱落である（全九一例中五六例）。A版になかった振仮名がB版で新たに追加された例（a）の方が多い（五六例中三六例）が、下巻の後半になるとその逆の脱落例（b）が目立ってくる。

次に、振仮名の有無以外の異同を本文上の正誤という点から見た内訳は、次の如くであった。A版が正しくB版で誤ってしまったもの（c）が一六例、A版の誤りがB版で訂正されたもの（d）が一一例、どちらとも判断しがたいもの、およびどちらも可能なもの（e）が八例である。cは覆刻時の単純な誤刻と思われるものが多く、dもうち五例は濁点や句読点の整理であるなど特記すべき異同は見当たらない。しかしeの八例については、それぞれ多少の説明が必要かとも思われるので、以下ざっと異同の様相を記しておきたい。

又次に→一又次に（上一九裏10）

一又次に→又次に（上三一裏1、同三三表5）

これらは、文頭の「一」の追加と脱落である。『祇園物語』の本文は、『清水物語』からの引用部の頭を、話題の転換を示す意味で「一又次に〜」と始める場合が多いが、その「一」は他行頭より一格高く記されており、製版時に彫り落とされやすかったようである。[7] しかし、「一」がないからといって本文読解上問題が生じるわけではなく、誤りとは必ずしも言えないので、追加も脱落もeに分類した。

越済→越済（上三九表9）

勇猛→勇猛（上四五表10、同四五裏4）

居→居（下三八裏7）

これらは、B版で振仮名が変更されたものである。まず最初の「越済」は、次のように用いられている。

孔子は魯衛にいれられず。孟軻の齊梁にもちいさるは偏に賣物にかひてなきかことし。わか朝にも尋候はゝ分〻の師は僧にも俗にもあらんか。此あたりにも越済せる道士あるよし。[8]

前後の文脈から、これは越在（ヱツザイ）[9] の意であるように思われる。しかしながら、越在が越済と表記されることがあったかどうかは未詳である。よって「越済」の読みは確定できず、eに分類した。二番めの「勇猛」は、例えば寛永十五年版『眞

草二行節用集』[10]の振仮名が「ゆうみやう」、寛永二十一年版『二躰節用集』[11]の振仮名が「ゆみやう」で、『日葡辞書』の見出し語も「Yumiō」のみであるから、当時はユ（ウ）ミヤウという読みが優勢であったのかもしれない。だが、前代に成立した『文明本節用集』には「ユウマウ」、「ユミヤウ」、逆に時代の下る『和漢音釋書言字考節用集』には「ユウマウ」、「ユメウ」と、それぞれ二種の振仮名が見え、ユウマウという読みも可能であったと思われる。三番めの「居」は、歴史的仮名遣いでは勿論「ゐて」が正しいが、この頃は「いて」も混用されていた（例証は省略する）。

あらそひなき／なり。たゝし　→　あらそひ／なき也。但（上四三表3）

この異同は前節でもとりあげた。埋め木部分を本行中に取り込み、体裁を整えたものである。

以上、A版とB版の本文の比較、検討を行った。簡単にまとめてみると、覆刻版であるB版の本文は、初版と思われるA版の本文より振仮名が増え、明らかな誤りもある程度訂正されている。しかし覆刻版の常として、単純な誤刻と思われる新たな誤りも見出され、誤りの総数はA版本文よりもやや多くなっている。

注

（1）『日本古典文学大辞典』第二巻（昭59　岩波書店）の『祇園物語』の項。

（2）天理図書館司書研究部編、昭22、養徳社。

（3）②国文学研究資料館本の表紙も丹表紙だが、上下巻とも、後表紙右下部に題簽の跡があり、後補表紙である。

（4）但し、筑波大乙本は上下巻が合綴されている。その表紙は、わずかに一部が残る題簽から、下巻の表紙であったことがわかる。

（5）『近世文学未刊本叢書・仮名草子編一』の翻刻は「あしからさるなり。たゝし」（79頁下段1行）となっているが、底本の天理図書館本は後印本で、この箇所が不鮮明であるためと思われる。

（6）全丁揃いの複写本に基づく。岩瀬文庫本の刷りの具合は、成城大本とさほど変わらない。濃縹色表紙で、下巻にのみ原題簽の一部が残る。印面高さは上巻二一・五糎、下巻二一・二糎。

（7）A、B両版とも「一」がない箇所もある（上二五表8など）。また、「一」は摺刷時に墨を付け忘れられることも多かったようで、後印本ではしばしば刷り落とされている。

（8）傍線筆者。

（9）「亡人不佞、失レ守二社稷一、越二在草莽一」（春秋左氏伝・昭公二十年）、「寡君越二在草莽一、未レ獲レ所レ伏」（同・定公四年）などの用例がある。

（10）大本三冊。刊記は「寛永戊寅霜月穀旦／西村左右衛門梓行」。

（11）横本二ツ切三冊だが、今回見た国会図書館亀田文庫本は上中巻欠。刊記は「寛永廿一甲申歳九月吉日」。

（やなぎさわ　まさき）